

はる
春はあけぼの (『枕草子』)

『枕草子』は10世紀末から11世紀初頭に清少納言という女性によって書かれた随筆です。300余りの長短の段から成っています。

『枕草子』には、3種類の段があると言われています。一つ目は、自然や人間社会の諸相を描き、感想を述べた、随想の段です。たとえば、春、夏、秋、冬の四季それぞれのすばらしさを描いた初段の「春はあけぼの」や、言葉の使い方について述べた「ふと心劣りとかするものは」などの段があります。本教材では、このうち「春はあけぼの」をテキストとして取り上げました。

二つ目は、清少納言が中宮定子（一条天皇の后）のもとで宮仕えをした時の体験談を中心とした、日記的な内容の段です。その典型は、中宮との機知に富むやりとりを描いた「雪のいと高う降りたるを」という段です。当時の日本でとても人気があった唐の詩人白居易の詩句をふまえたエピソードが記されています。

三つ目は、同じ種類のものごとを並べて示す類聚的な内容の段です。「山は」「鳥は」などの「……は」で始まる段と、「にくきもの」「あはれなるもの」などの「……もの」で始まる段があります。

『枕草子』は和文による随筆というジャンルを切り開いた作品であり、後の『徒然草』や江戸時代の文学にも大きな影響を与えています。